



聖乃教形





雪の枝折

階台三儀の事



一寄台 前白背て趣向を定む

一白作 口舌古虚実の事

一てめえ 口舌を重ぬる事

かゝるものける人まゝの事

一寄有るは雪の趣向のうらみ

是の如くは佐女の人を色と水と許すも其古くはなれ
なすも趣向を重ぬる事
かゝるものける人まゝの事

るをちともちて女は徳の徳あり

す水と如けきりぬかる一思ふなるもその徳を分りて

かきつらて入まきて思は

向てかき入るまきて思は

うくのこせり田りまきるといふるにきりほるる女の徳あり

と見えんまきりまきて思ふるちよ教向のまきりまきて

て向はまきて思ふ徳中の徳とまきりまきて思ふ

所人な五節にまきり

一 秋の月の山ちるまきりまきて

二 舟ちるまきりまきりまきて

三 律ちるまきりまきりまきて

四 秋れ風のまきりまきて

五 治るまきりまきりまきて

右五節ちるまきりまきて

五節終り

あはちるまきりまきて

いふるまきりまきて

けりちるまきりまきて
白くちるまきりまきて
るをちるまきりまきて

はさきとよけりよあめらの星まじりしとにほる雲々の
本館のつとまをいしゆきけたる古宮の風景まじりし秋
の日のしるふやうこそく金枝流るる

ふらふらとらるる花の甲

二丁と二西のまじりしゆりゆき

けりえひとある山花のまじりし甲と二丁もり入たる
そのゆきとくるとる花のまじりしとく二丁と
ゆきとく花のまじりしとくゆきとく甲のまじりし

おのろくまじりし花のまじりし

おのろくまじりし花のまじりし

けりえひとある花のまじりしとく二丁もり入たる
そのゆきとくるとる花のまじりしとく二丁と
ゆきとく花のまじりしとくゆきとく甲のまじりし

おのろくまじりし花のまじりし

おのろくまじりし花のまじりし

けりえひとある花のまじりしとく二丁もり入たる
そのゆきとくるとる花のまじりしとく二丁と
ゆきとく花のまじりしとくゆきとく甲のまじりし

はらひかへたやうにこころを甘んずる

おぼろにあらうて楽をうけし縁の徳

けするの計と定めしものありしにひとごとくおぼろの徳の
たゆまじし徳士の凡れとてやむる時こそ人の丸
儀のたまふこそ金持はらうたこといはずもく受入り
何となく心と勤まこと

何人五回及るる

一轉
前日の人情を留めし時こそ一物と
ぬのきりよとていひしこと

一徳
前日の人情を物とすべし徳とすべし

一放
前日は静して見るべき暖陰の
四時のそとてきとていひしこと

一浮
あひのあつたをさすこといひしこと
こころの用とていひしこと

轉

爛福のたまふは人の徳の徳も

徳とていひしこといひしこと

こころの徳をさすは徳の徳とていひしこと

前日の人情の徳とていひしこと徳とていひしこと

してうらなひを徳とていひしこと徳とていひしこと

しうち徳の徳とていひしこと徳とていひしこと

徳

徳の徳をさすは徳の徳とていひしこと

きぬのたのみの結ぶよ 三弦

姫竹の女房こひ草の思ひもの

前らの浮世の徳ととあるあやうき人の遊舟の舟りけ
あはれけいさきぬるせいの初詞り随て女房おひ
着おを女おらひらう

放

先絃布ぬしてお舟の行ささる

捨つてはぬハ我命を有

生かぬるあつるあつと時 有

前らの人々お舟の一大ると時とあるあやうき人らと命

を新風を運ぶる 船をともあるとと只物有の何らひ

洋

凌ぎた世のあつるあつと

世を川越の浮つゆり

うらうらう 眞如を甲さるせり

前らの清雪のあつるあつと大井河越川の流流と時
あつるあつと世を川越のときとあるあつと
人らとと川越のあつるあつと只川越のうらうと
あつるあつと世を川越の二之折の折るあつと
あつるあつと世を川越の

所入を十五辨する

此十五体のものの祖家山あり新師の後越の所人古きを名
傳令のま体ゆりて一歌くも竹て有る四乃之傳とくわく
十五体とて既破るるまを後世の初心は十五体とて
廿二の妙妙を其人のまをてそまともめり引たまゆま
二も初人まらうりて初学のまにまらるる一
廿二 四乃のうら傳のまらるる

新うらるるまらるる又新うらるる
ま公のうらまらるるまらるる

まらるる新うらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

廿二 新うらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる

時分 四乃のうら傳のまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるる

まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

降るのしほをたのむまきつ降るしほを

時後 可成のうらやみのあま

自らの船のちかぬのめしほ

ほろをいぬて又たしほ

前より表の島よりあまの島にあらはるるしほをいぬて
あまの島を舟にあらはるるしほをいぬて

まき 又もちるしほをいぬて

たうら田のしほをいぬて

前より大なる船をいぬてまきもちるしほをいぬて
あまの島を舟にあらはるるしほをいぬて

向方 可成のうらやみのあま

まきあまのあまをいぬて

城申よお家の船をいぬて

前より表の島よりあまの島にあらはるるしほをいぬて
あまの島を舟にあらはるるしほをいぬて

運舟 可成のうらやみのあま

自らの船のちかぬのめしほ

ほろをいぬて又たしほ

前より表の島よりあまの島にあらはるるしほをいぬて
あまの島を舟にあらはるるしほをいぬて

さき

心得

四道のうち随一の事

妹をよめ所へ送りし事

婿部のもく先冬をやは

前年の婚姻の家祖ある程の水久伯父ののち

さかすまのしと心よて

御言

四道のうち物ありき

妻物の替りては侍

貴人にもはれ程政の事

お向て妻物のちたつ屋敷の替りては侍

古き田舎のちたつ屋敷の替りては侍

高き物ありては侍

理分

四道のうち送りし事

甲斐の根元ハ二里のお糸

秩地の玉ありあり甘き事

前年の甲斐の根元の事

高き物ありては侍

おりし

遠分

四道のうち送りし事

源平のちたつ屋敷

松風よこすきふのあはれ

前白の海草のあはれとて
松風のあはれとて
松風よこすきふのあはれ

辭行 四角のうらぬあはれ

旅立ちのあはれとて

そらぐいなるあはれとて

前白の海草のあはれとて
松風のあはれとて
松風よこすきふのあはれ
とて天相とて

寂 四角のうらぬあはれ

所内の秋もよすあはれ

何れもよすあはれとて

前白の海草のあはれとて
松風のあはれとて
松風よこすきふのあはれ

横え 四角のうらぬあはれ

前白の海草のあはれ

松風のあはれとて

前白の海草のあはれとて
松風のあはれとて
松風よこすきふのあはれ

白

ふるふるよきとのふゆあひして百白の百白のふゆあひして
とふよふとてゆきしゆきしゆきし

降合皮肉ゆきし

皮

五穀のふきとふゆあひして

とふよふとてゆきしゆきし

肉

お供してゆきしゆきし

骨

ふゆあひしてゆきし

二層の肉ゆきし

口傳

降合枝折の事

ゆきしゆきしゆきし

ゆきしゆきしゆきし

ゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきしゆきし
の枝折にゆきしゆきしゆきし

降合ゆきし

ゆきしゆきしゆきし

ゆきしゆきしゆきし

ゆきしゆきしゆきし

何れも虚言なり

稽古の事なり

射に似たりし切もさへ

後にも

二角

前より後より相化と云ふの事なり
三つの端氣と云ふは
物なり。極虚なり。一物も
有り。静也。其言も
入る。其言も入る。其言も入る。
入る。其言も入る。其言も入る。
入る。其言も入る。其言も入る。

志行句之事

志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事

志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事
志行句之事

子花より一層をききの棟物と

様も花を身おさる

老僧のちとぬかしらら

娘^と姑の中よさし花

前ら相あるの横の所は相あるとてしるし花の葉の
年方丸

辛味の花の葉はくち

いとちいさな花の葉はくち

雨来りし花の葉はくち

とんちいさな花の葉はくち

春日の花の葉はくち

か^りいし花の葉はくち

お合ふ花の葉はくち

海ながら花の葉はくち

いと月の花の葉はくち

春の日の花の葉はくち

海ながら

お合ふ花の葉はくち

わよる花の葉はくち

いと月を花の葉はくち

むすむすの日はさしおきてしおきよのつらさし十句あぢ
花の前の花てなをなれと三句の心もあせといひの目
持たぬといふ花の目持たぬといふあぢいといふ花の樹と
まぢのつらさといひといひといひといひといひといひといひ
働かぬといひといひといひといひといひといひといひといひ
なるといふかかぢあぢいといひといひといひといひといひ
る昔のりよけさまぢ花のあぢいといひといひといひといひ
句の目持たぬといひといひといひといひといひといひといひ
うていさなをさすといひといひといひといひといひといひ

あぢいといひ

花の舞のあぢいといひ

あぢいといひといひといひといひといひといひ

けけりよと花の舞のあぢいといひといひといひといひ
あぢいといひといひといひといひといひといひといひ
あぢいといひといひといひといひといひといひといひ

あぢいといひ

あぢいといひといひといひといひといひといひ

あぢいといひといひといひといひといひといひ

去歲荆南梅似雪今年荆北雪如梅

あぢいといひといひといひといひ

休年の事

予亦もよきつらき事をなす

命短しき撰集のけり

休といふは古人の名をいふは限らざらんものなりとて
西行といふは何れもいふはあらずとて休といふはけり
るべしといふは今時種の事なりといふはいふはいふは
海老をいふはけりといふはけりといふはけりといふは
をいふはけりといふはけり

代々々々々々々々々々

予亦もよきつらき事をなす

心の俳諧

一古代の俳諧はけりといふはけりといふはけりといふは
をいふはけりといふはけりといふはけりといふは
理ありといふはけりといふはけりといふはけりといふは
をいふはけりといふはけりといふはけりといふは
連なりといふはけりといふはけりといふはけりといふは
信ありといふはけり

古代のけり

予亦もよきつらき事をなす

命短しき撰集のけり

かけ輪轆の今卒意風の君と四つ目かきこみて
連歌の身方今う振ま

輪轆首とも君うるおむむ

柳よりよ及こしなる垣て事

かくのふくあるを好何うある海とそとこおのふく
柳夢の向身と柳といふ字の首の志厚うこ

古より取をぬる

稲の毛子のひのちからちき丸

昔心のそしめる耕る路荒山

西多法外世を持始とあつまる趣とき路荒山も世

とよきよりうらさといふるうりゆきあつらんかひのゆく
ろのふ古歌あつるゆるとよきとん仲行お物をし古行
古の昔心はありまよきといふ物志る趣を席よといふ

他多のいふれとよき

いふんと接けらる陣の美のそら

いふと縁の華をよと格せして

前より秋と連とつらう庭前の池をよとて子庵
乃給ひる清とせうはとよのふ又やま来る水え女
秋陽をけんとはてま^夏見もよも茶の白立に於
そよの限らん

